

## 令和5年度福島県立美術館運営協議会議事録

- 1 開催日時 令和6年2月20日(火) 13:30~14:50
- 2 開催場所 県立美術館2階会議室
- 3 委員数 10名
- 4 出席委員数 8名

### 5 議題

- (1) 令和5年度事業の概要について
  - ア 令和5年度事業の状況について
  - イ 観覧者数等の状況について
  - ウ 福島県立美術館運営計画指標の達成状況について
- (2) 令和6年度事業計画(案)の概要について
- (3) その他

### 6 議事

#### ○福島県立美術館長挨拶

日頃から当館の運営に多大なる御支援、御協力をいただき改めて御礼申し上げます。令和5年度は、5月にコロナが5類に移行し、徐々にコロナ禍前の状況に戻ってきました。当館の企画展では、古美術から近代の作品まで多彩な大阪市立美術館コレクション展に始まり、ブルターニュ地方の光と風が感じられる印象派などの展覧会、精神科医・金子氏の版画コレクション展などを開催した。教育普及では、久しぶりに事前予約なしや3日連続の創作プログラムなどを開催した。令和6年度には、当館は創立40周年を迎える。福島県出身・ゆかりの作家を紹介する「福島的美術家たち2024」や、これまで当館に御支援・御協力いただいた関係者の皆さまに感謝しつつ当館の歴史と魅力を伝える「みんなの福島県立美術館 その歩みとこれから」を開催予定である。今後も多くの県民の皆さまに喜んでいただける活動を続けていくので、今後とも御支援・御協力をお願いしたい。本日の運営協議会では、令和5年度の事業概要や令和6年度の事業計画について、忌憚のない御意見を頂戴したい。

#### ○出席委員及び事務局職員等の紹介

鈴木淳一会長が、議長として議事を進行した。

#### (1) 令和5年度事業の概要について

令和5年度事業の概要について、事務局が資料に基づき説明を行った。

#### 《質疑応答》

【岡部兼芳委員】：学校連携事業について、平成15年から続けているとのことだが、学校サイドの反応は変わってきているか。先生方の期待感や、受入体制

の変化は感じるか。

【副館長心得】：長期に渡って開催している事業であり大変人気が高く、毎年多くの申し込みをいただいている。ただ、物理的に開催できる本数が限られており、なかなかすべての要望には応えられていない。学校現場からは非常に好評をいただいている。同じところから何度も申し込みをいただいたり、今展示しているように展覧会を見に来ていただいたり、うまくまわっている教育普及事業の一つである。

【大槻佐恵委員】：現在いわき市で美術の教員をしており、距離の問題もあり申し込みが難しいところではあったが、美術館側からそういったお話をいただけるのは、学校側としては学びの充実という点で大変ありがたい。実際に生の声を聞く、本物を見る機会ということは、美術館に足を運ぶ生徒が少なくなっている現状の中では大変貴重な機会である。教育課程など学校側のいろいろな課題がある中で、学校側としても美術館側としてもいい機会となっているので、今後も続けてもらいたい。

【笠原美智子委員】：3点ある。1点目は、作品収集について。寄贈が多いのは大変素晴らしいが、寄贈だけではかなり偏った収集になる。ベン・シャーンの企画ができたのも、ベン・シャーンの商品があまり高くないときに買えたからというのがある。作品収集は、どれだけ学芸員が研究して、これだと思ったものをそのときにちゃんと買うかによって、その美術館の価値が変わってくる。予算化は必要だと思うが、美術館の売りになる作品を収集するだけではなく、若手・中堅の作家が食べていくための作品の収集など、美術館が購入して作家が伸びるように若手作家の作品も購入してほしい。写真美術館でも杉本博司さんの作品を92年～93年に購入し、当時は1点50万円ほどだったが、今では1点1,000万円ほどする。若手・中堅のときとはそれだけ差があり、購入しようと思ってもできないことがある。美術品の収集の予算化は美術館の両輪だと思う。2点目は、調査・研究について。いろいろな運営委員会や調査への協力は素晴らしいと思うし、日本の中での関係も大事ではあるが、国際化が言われている中で、海外との協力関係や海外での調査はどうしても必要なことである。どのくらい海外出張ができるのか存じ上げないが、やはり現代美術を扱う美術館であれば必要だと思うので、行政側も、個々の学芸員のお小遣いではなくきちんと予算化をして行けるようにして、その成果を事業に反映できるような体制にしていきたい。3点目は、入館者数などの数値目標は必要なのか。7万人は優れた数字だと思う。ア一

ティゾン美術館は東京駅のすぐ前で、学生無料で、常設展をダブルカウントせずに23万人入場しているが、その数が多いか少ないか、あえてブロックバスター展はしないと宣言して、すべて独自の展覧会をやっている中で、23万人はよくできた数字だと思うが、7万人はよく頑張った数字ではないか。これがジブリやウルトラマンの展覧会ならば10万、20万いくと思うが、その数字にどのくらい意味があるのか。私は意味が無いと思う。数値目標、数値化というのは大事だと思うが、あり方を行政側にはよく考えてもらいたい。

【館長】：1点目の作品収集、2点目の海外における調査、旅費の関係については、予算に関係することかと思うので、併せてお話をさせていただく。限られた県全体の予算の中で、美術館として必要なものを有効活用できるよう財政局と毎年度協議をしているところである。美術品の取得に係る部分については、何年も購入できていないということ踏まえ、私の方でも強く話をしながら、すぐにというのは難しい状況ではあるが、とにかく財政局に働きかけていこうということで動き始めている。今後も、今回の御意見をもとに、美術館の予算要求について学芸員と一緒に考えてまいりたい。3点目の数値目標については、計画の評価の中でどうしても数値という目線があるので、目標を定めてはいるが、我々もそれだけではないと思っており、美術館の活動では、学芸員が美術奨励賞を受賞したということがあり、教育長にも報告した。それだけではないが、美術館の活動をしっかり知ってもらおうということを機会を捉えて行ってまいりたい。7万人という数字をすばらしいと褒めていただいたと捉えており、心強く思っている。

【大槻委員】：学校教育の観点から、アートカードについて質問がある。私自身アートカードを授業に用いたことがあり、地元福島県ゆかりの作家の知識などを生徒たちに伝えられることがうれしい。子どもたちも資料集に載っているような有名な画家以外にも郷土の作家に注目でき、よかったという反応が多い。アートカードセットが貸し出されている学校とそうでない学校に差があり、貸出となると要望した学校のみが使えることになるが、学校として購入できると、赴任してもずっとその学校で使うことができる。福島県にゆかりのある作家の鑑賞を教育課程のサイクルに組み込むことができると思うが、購入ではなく貸出としている理由があればお聞かせ願いたい。

【副館長心得】：アートカードについては、美術館協力会から費用の援助をいただいて制作したという経緯があることから、美術館の所蔵として扱う必要がある

り、各学校に貸出という形式を取っている。ただ、アートカードは現場の先生方に非常に有効に使っていただいているので、今後いろいろと展開を考えられると思う。今回御意見をいただいたので、今後新しく作るような場合は検討していきたい。

【齋藤美保子委員】：美をつくし展、ブルターニュの光と風展はともに楽しませてもらった。どちらもテレビ局が主催だったため、テレビCMを何度も見た記憶がある。それに対して、亜欧堂田善展はとていい展覧会だったが、テレビCMが無かったと思う。企画展の告知において、県立美術館としてどのくらいテレビCM等に予算を割くことができるのか。

【館長】：予算については、広報だけでなく全体的な計画の中で効果的に執行していきたいという思いの中で、広報の部分も全体を見ながら考えている。予算に絡まない広報もあり、今はネット上ではいろいろなツールがあり、資料でも説明したが、令和5年9月にインスタグラムを開設した。それから、教育委員会が今年度から始めた公式noteに、美術館・博物館専用の場所があり、そこで掲示を行ったりと、広報のツールを増やしており、新聞報道で協力いただいたり、テレビを含めていろいろなツールを使って工夫をしながら皆さまに伝わるように広報を進めている。

【齋藤美保子委員】：亜欧堂田善展は本当にいい展覧会で、展覧会が終わったらそれっきりではなく、未だに語り継がれている。展覧会図録の在庫がまだあればこれからも必要な方がいると思うし、会期中だけではなく後々に残っていく仕事になるので、学芸員の方は頑張っていると思うが、県民としては、そのようないい展覧会を逃したくないので、いろいろな手で告知をお願いしたい。

【鈴木会長】：私も県の文化センターの仕事をしており、やはり広報で非常に苦勞をしている。今メディアが多様化しているというか、先ほど新聞の話もテレビの話も出たし、SNSも何通りもやっているということだが、文化センターでもいろいろと努力はしている。しかし、新聞を取っていない人や、テレビをあまり見ない、SNSやYouTubeばかりという人もいたりするので、どこにどのくらい力をかければ全員に届くかということ、実はどこにやっても全員には届かないのではと悩んでいるところである。せっかくいい企画をやったのに、もう少し知ってもらえればという思いがある。NHKの細田委員から、何かPRの仕方などでアドバイスがあればお願いしたい。

【細田修二委員】：美術館の近くに住んでおりすべての展覧会を拝見している。美

術の専門家ではないが、PRという面で言うと、なかなか難しく、美をつくし展とブルターニュ展は非常にインパクトのある作品で人の目を引き、二度、三度と来られる方もいた。ただやはり、その他の展覧会についてはもったいないと思った。主催に新聞社と民間放送の方が入るといろいろな形で展開できるが、美術館単独の場合は、福島に限らず他県でも非常に苦戦している。私たちが広告費をほとんど使えない会社なので、テレビではやっているがテレビを見る方は限られるため、いちばんはデジタルをどう活かしていくかが大事なのでは。Twitterについても、自前でやっているのか業者に頼んでいるのかわからないが、もし自前でやっていて費用もさほどかからないのであれば、一度ちゃんとした専門家のところで研修を受けるだけで全然違ってくる。どのようなキーワードで訴えるかが大事で、ホームページの方も当然県立美術館なのでバズるということばかり意識することはいけないが、基本的にやはり検索で引っかからないといけない。ホームページとTwitterは、毎月アクセス数やどのような記事が読まれているか、どのような見出しならアクセスが増えるのかを分析したり、どういうキーワードの記事は検索で上位に来るようロボットが判断するのか専門のところで研修を受けたりするなど、お金をかけずに若い層を含めてPRしたいのであればデジタルに力を入れてやっていただくのがいいのかと思う。それも外付けで頼むとお金がかかるので、ある程度広報担当の方に一定期間そういった訓練を受けてもらうだけでもすごく変わる。Twitterも割と遠慮がちな発信回数だと思うので、節目節目で発信して、お金をあまりかけずにそういったスキルを磨いていくのがいいのではないかな。

(2) 令和6年度事業計画(案)の概要について

令和6年度事業計画(案)の概要について、事務局が資料に基づき説明を行った。

《質疑応答》

【細田委員】：美術の専門家ではないが一般の目線と報道関係の目線として検討していただきたいと常々思っているのが、美術が好きで美術館に来る方はもちろん、美術にさほど関心が高くない人が訪れる機会をいかに作るかが大事だと思っている。先ほど数値目標のこともあったが、数値にとらわれるより、美術が好きな人以外の人に、美術に触れる機会、入口になるというのをぜひお願いしたい。来年は40年の節目ということで、比較的報道機関なども取り上げやすいタイミングであるとともに、セレモニーの式典もあるかもしれ

ないが、ぜひ専門家を呼んでの講座だけでなく、若い方やお子さんが何か一歩踏み出しやすいようなイベントなど、美術に全く関係ないものをするわけにはいかないと思うが、美術館がふれあう場所になるようなことをぜひ考えていただきたい。美術館は信夫山とのコントラストなど訪れるたびにロケーションが素晴らしいと思っている。いろいろな人が写真を撮っており、そういったことも建設当時の精神にあるのではと思っている。ここにも食事ができるところがオープンしたので、気軽にくつろぎながら鑑賞できる場所や、なるべく敷居を下げてもらえるようなイベントなど、堅いものだけでなくお子さんの気を引くようなものがあればいいと思う。また、再塗装されるまでレジェの彫刻をまったく知らなかった。何か変わったと思って見に行ったら素晴らしいものだったということを知り、この美術館そのものについて知らないことが多いので、そのあたりもPRしていただければと思う。スポンサーによって可能なものと可能でないものがあると思うが、県民の宝である美術館の40年という節目であるので、いろいろ考えていただけるとありがたい。

**【館長】**：まさに御指摘いただいたようなことが大切だというのは美術館の内部でも認識はありつつ、なかなか何をしたらいいのかということもあった。今の御意見を参考に、美術館で楽しんでいただく、素敵な時間を過ごしていただく、そういうことを目指して実施してまいりたい。

**【齋藤勝正委員】**：県の教育委員会の文化課で勤務していたときに、美術館の建設準備室ができ、多少予算の確保などで携わった。40周年記念ということで、参考までに聞かせていただきたい。今回40名の作家を紹介するとのことで、以前は1980年代に3回ほど2年ぐらいのスパンでやっていたと思うが、次回があるとすれば何年後ぐらいを考えているか。

**【副館長心得】**：今回30年ぶりに福島の実画家たちを開催するにあたり、何年かかけて作家調査をした。その中で、今まで紹介すべきなのにできなかった作家がたくさんいらした。また、今回では紹介しきれない部分が多量とも言えることも改めて感じた。何年後というのはこの場では申し上げられないが、ある程度定期的にといいよりは、時機を見て、30年も空くということがないよう次回について考えていきたい。

**【齋藤勝正委員】**：少したまり過ぎてしまったという感じがする。30年の間に物故された方がかなりいる。その方たちが存命中に開催していただければありがたかった。

【舟木委員】：友の会もコロナ前は会員が100名以上いたが、今は半分の50名ほどに減ってしまった。コンサートやチャリティーバザー、研修旅行などの行事もコロナの間できなかったが、昨年度くらいから復活してきて、来年度は人数を増やしていく。会員を50名から100名にするということは、美術館の応援団を50名作るということなので、美術館に直接貢献できると思う。また、友の会は会費を徴収して自主運営でやっているが、予算の縛りがないので、ぜひフォローできればと思う。友の会でできることがあれば言ってもらいたい。

【岡部委員】：トークフリーデーについて、どのくらいの頻度、スパンを見込んでいるのか。1日に絞るのか、期間を設けて行うのか。

【副館長心得】：今のところ年3日を予定している。その日は開館から閉館までトークフリーにするつもりである。

【岡部委員】：障がいのある方にも配慮した取組みだと思う。障がい福祉に携わる者としては、障がいのある方やその支援者のところまで情報が行き届くだけでだいぶ時間がかかる。周知の方法などは、日にちが短かったりするとなおさら工夫が必要かと思う。日数なども増やしていただくとありがたい。

【館長】：トークフリーデーについては、当館で初めての試みなので、小さくやってみて、課題等を整理しながら来年度以降考えていきたいということで3回になっている。また、周知については、年間の予定を年度初めに皆さんにお知らせしているが、その段階からお知らせをし、また近くなったらお知らせをするということで今のところ考えている。今伺ったことも参考にしながら、さらに広報について考えてまいりたい。

### (3) その他

【齋藤勝正委員】：若冲展など大きな展覧会をやる際に、駐車場がなく、外で渋滞が起きる。庭の芝生の部分などを多少駐車場にできないのか。人を呼べるような環境を作れないかなと思っているが、難しいか。

【館長】：御指摘のとおり、大規模な企画展の場合には駐車場が満車になってしまい、皆さまに御不便・御心配をおかけしているところである。今、駐車場の拡大という話があったが、予算等も関わることなので、すぐには難しいと考えている。大規模展覧会の際には、これまでの駐車場不足に対する課題等も踏まえて、さらに十分に実行委員会のメンバー等と協議しながら、今までよりもいい方法はないか、早い段階から検討してまいりたい。

【齋藤勝正委員】：作品の収蔵庫について、ものすごく狭くなって、作品の出し入れにも大変苦勞されているようだが、収蔵庫の増築などの予定はないのか。あるいは要望する予定はないのか。県の社会教育課との相談にもなると思うが、増築なども考えていいのではないか。

【館長】：収蔵庫については、社会教育課とも課題として情報共有しているところである。ただ、駐車場同様多大な費用が伴うため、継続して今後検討を進めてまいりたい。

【笠原委員】：4月1日から長野県立美術館の館長になる。それに関連して、学芸課長と副館長の兼任は大丈夫か。アーティゾン美術館はここと同様に美術専門でない石橋さんが館長、私が副館長で、学芸課長の専門がいるが、副館長の業務はマネジメントがかなり大きな比重を占めており、学芸課長と副館長の業務は使う頭が違うので、兼任は無理があるのではないか。東京都写真美術館では12年間学芸課長を務めたが、副館長が都の行政系職員で、今度の長野も同様である。専門の館長で、副館長が行政職で、学芸課長がいて、という体制。どこかで学芸課長の業務と副館長の業務を分けないと頭が分裂して、どちらの仕事もできなくなると思う。副館長の仕事はマネジメント、バックアップに徹し、学芸の方は学芸課長に任せていた。学芸課長の仕事は前に出ていろいろとやらなければならない。この2つを両立するのは無理なのではないか。館長が専門職ならまだいいと思うが、それならば副館長が行政職でないバランスが悪いと思うので、そこが大丈夫かと言う点と、学芸員の数は足りているかという点をお聞きしたい。

【館長】：学芸部門を中心に、美術館の体制について御心配いただいたかと思う。この体制になってからいろいろな課題も見えてきて、課題を整理しつつ必要なものについては人事サイドに対して美術館から説明をしてまいりたい。

【議長】：すべての議題について承認してよいか、お諮りする。

【委員一同】：異議なし。

【議長】：すべての議題を承認する。本日委員の皆様からいただいた貴重な意見が、館の運営に適切に反映されることを期待して、議事を終了する。

【館長】：長時間にわたる御審議、感謝申し上げます。委員の皆様からいただいた意見を、今後の運営に運営に生かしてまいりたい。

以上をもって、令和5年度福島県立美術館運営協議会を閉会した。